

い風の行進は体も服もぬれとおして、靴も一入重たく、はじめに見えた。学生たちは次々にいくつかのグループをなして、先頭に或は木で作った素朴な十字架を、或は布に画いた十字架をかかげ、静かに聖詠を唱えながら列をなしている。総勢すべて男女一万人だとう。風雨にうたれて服装はみじめに見えたが、その顔はいずれも明るくよるこびと望みにみちているようであった。高く低く唱える聖詠のリズム。その行列は二時間もつづいたであらうか。途中の難澁に堪えかねて担架で運ばれている女学生も数人あった。

聖堂の周りに、みなが荷を下してとどめるとやがて高い塔から鐘がなり出した。そして高く大きな扉の開かれる中へ、彼らは静かに吸込まれて行った。そして一万人の全部が入って後、一般の私共も入堂をゆるされたのである。光はろうそくの灯だけであった。それがうすぐらい中にあちこちにゆれて、石の床に腰をおろした満堂の会衆である。やがてパイプオルガンのひびく中を、白衣の修道者たちがろうそくを手にかかげ、列をなして入堂。祭壇を前に

四列に並び、中に通路をあけて二人づつ向い合つて起立。その数は、二百人もあらうか。時は夕の七時、ミサがはじまつたのである。厳肅そのものの中にオルガンは更に新しくひびき、主唱者のハレルヤ独唱、それにいついて大合唱がはじまる。さすがに広く高い堂内も、たちこめるその唱声を包みかねて天にも裂けよと思われるばかりであった。ミサは更に進んで、キリエ、グロリアなどのグレゴリオ聖歌の斉唱に移った。人の声がなしうる一番美しいこの歌声は同時に壮嚴そのものであった。かつてペートベンは自分の全作品をもつてしても、

その一小節の美しさにも及びえないと嘆いたというグレゴリオの聖歌が今ゴシックの最上の聖堂にみちて神をあがめている。復活節のころ、シャルトルの聖堂で大壯嚴ミサが行われるということを前から聞いていたが、はからずもこの日にめぐりあい、参列出来たことは何と有りがたい幸せであつたであらう。

申世の立派で美しい聖堂が、現代の人々の単なる観光の場所としてでなくて、かくも心強い信仰のよりどころであり、ことに

嵯峨野 吟

渡 辺 英 一
(女子大学教授)

手入れせぬ 池一つあり 春の午后

苗代を兒に見せんとて 畦を行く

れんげ輪の れんげの上に忘れられて

竹籩をまがりしところ 藤の花

虚子の碑のあたり人無く 風光る

兒に向くる レンズの隅の柿若葉

柿若葉 兒の背伸びして後二寸

竹籩の 無番踏切 青嵐

夕桜 嵯峨豆腐など求めけり

化野かしのの名に 惹かれ行く 春の月

多くの若者たちの力強い勤行の場として生きていくことに一入感動した。

ヨーロッパ六十日の旅の中で、もっとも強い印象をうけたのはイタリアのアッソジわけてもあのカルチェリの草庵と、このシヤルトルの聖堂であった。これらはこの世の旅にとつても二つの大き札所のやうに、いつまでも、忘れられぬものとなるであろう。

(昭4女専英文卒・主婦)

山靴のおと

一井 三郎

鈴鹿愛知川源流 (昭30 夏)

愛知川のながれの岸の朝明けにからす
あげはの舞ひ上りをり
愛知川のながれはきよし朝な朝な水浴
みすれば肌につめたし

十勝岳山麓 (昭32 夏)

暮れ残る十勝のふもとひろびろと岩も
もだせりわれももだせり

十勝岳ひろき裾野の夕まぐれひそけき
花と物語りする

遠見尾根 (昭34 春)

春の雪ふみくだきゆく遠見尾根大遠見
の道のいや遠長き
尾根ゆ見ゆるまなかひの沢の雪の上に
かもしかをりと山人のさす

朝日連峯 (昭36 夏)

みちのくの天狗角力取山といふ山のや
どりのまどかなる月
月明に龍ヶ嶽みゆ露しとどおりゐる草
に夜は更けぬらし

比良山スケハラ小屋をひらく (昭36 秋)

比良山に小屋をつくりてつどひして歌
ふ歌声みなうらわかき
比良山の人あまり来ぬ山かげのみちの
ほとりのりんだうの花

伯耆大山 (昭36 冬)

元谷にふりつむ雪のこのいくひ日ごと

にふればいよよふかしも
雪やみつ北壁見ゆと子らのいへはわれ
もいでゆき雪すべりする

木曾御嶽 (昭39 冬)

わけて入る奥山道に雪しろく木曾の御
嶽しづまりてゐる
大檜雪をもちつつひろげたる枝はあか
るく光みちたり

赤河原 (昭37 冬)

冬枯れの木立音なく赤河原さむざむと
降る雨にぬれたり
山峽のひたくもる空に甲斐ヶ嶺は白く
静けくそびえたちたり

舟溪山荘 (昭39 冬)

荒谷の冬のさなかのながき夜をいねが
てにゐる山の宿なり
小屋番の若きをとももの言はずひそ
まりてゐる山の宿なり

ふたたび比良山にて (昭42 冬)